

自信をくれた私の宝「日本」

シユレヤ デイウエ

(インド。プネ大学・女・二十歳)



大学生になって専攻を選ぶ時、私は英文学を選びました。そして、「英語のほかの外国語も、何かをやってみよう」と思い、「第二外国語」で日本語を選びました。「何で日本語？字も読めないし、文法も硬いし、漢字がいっぱい」と思いながら、緊張して日本語のクラスへ行きました。でも、日本語の勉強が楽しくて、日本語が好きになりました。

その時、日本について知っていたのは、まだ「東京」だけでした。

ある日、私は日本人の友達の家を招待され、友達に日本のことをいろいろ教えてくれました。そして、日本とインドが似ていることに気がきました。

仏教やお守りのこと、神話学など。そして、インドの「サラスヴァティ」という神様と日本の「弁財天」は同じだそうです。その上に、尊敬語と謙譲語の使い方も似ています。「どこかで日本人とインド人はつながっている」と思いました。

友達は日本の写真をたくさん見せてくれました。富士山、花火、着物、花見の写真。おかげでインドについても「日本」が感じられました。その時、初めて「日本は東京だけではない」とわかりました。それからは、日本の歌ばかり聞いたり、日本のドラマだけ見たりするのは私の日常になりました。

そして、日本の文学を読んだらとても驚きました。「百人一首」のおかげです。

「田子の浦に うち出でて見れば 白たへの 富士の高嶺に 雪はふりつつ」

山部赤人が作った短歌を読んで、富士山の写真が目につかなくて嬉しくて嬉しくてたまらなくなり、とても感動しました。「日本が大好き」という気持ちになりました。

「日本」と何の関係もなかった私は、いつの間にか「日本だけの関係がある人」になりました。遠くはなれていても、日本人の友達は私の力です。

「日本」と「日本語」は私に自信をくれたのです。

日本へ行ったことは一度もありません。ですから、私の日本は、まだ想像の中の国です。

満開の桜、東京の高いビルから見える富士山を想像しています。

日本の「ビギン」の感動的な曲「島人の宝（しまんちゆぬたから）」が大好きです。

「教科書に書いてあることだけじゃわからない大切な物がきつとここにあるはずさ」

私にとって、これからも、「日本」は私の宝で、日本人の友達は私の宝物です。



「一平方メートル」のトイレは日本の縮図

王志博

(中国。宇都宮大学大学院・男・二十五歳)

トイレは、どの国にもあり、小さな子どもからお年寄りまでが一日に何度も利用する場所です。そんなトイレを「汚い」、あるいは「臭い」と思う人はたくさんいるでしょう。しかし、私が二年前に初めて日本に来た時、私の中の「トイレ」という概念を大きく覆したのです。

日本のどこのトイレもキレイで、機能にも優れ、とても感銘を受けたことを覚えています。日本人の清潔好きのため、どこのトイレもキレイに保たれています。それだけでなく、便座が温かく、ウォッシュレットが付いており、トイレ用品が豊富で、日本の技術力が発揮されています。トイレは、単なる排泄する場所だけでなく、休憩や更衣室の役割もあります。特に女性はトイレで身だしなみを整えたり、赤ちゃん用のベッドが設置してあるそうです。トイレの社会的役割も大きいです。日本のトイレの個室はせいぜい一平方メートルですが、日本人の細かなところへの配慮が目に見えます。

大学の日本語の授業で、日本では小学生の頃から学校で「掃除の時間」があると知り、中国出身の私は大変驚きました。もし中国で同じことがあったら、「自分の大事な子どもに汚いトイレ掃除をさせるなんて無理だ!」、「掃除は掃除のおばさんのすることじゃないか?」と怒り出す人がたくさんいるでしょう。私も初めはそう思いました。しかし、学校教育の大切な一環ではないかと考えるようになりました。小さな頃から身の周りをきれいにする習慣があると、物を大切に使う心が育まれ、気持ちよく生活することができます。トイレを掃除する側と利用する側の双方の気配りによってトイレがキレイに保たれているのです。

日本に来て初めて「トイレ文化」という言葉を耳にしました。日本人の気配り精神が「トイレ文化」を生み、支えているのです。この「一平方メートルのトイレ」こそ、キレイな日本、便利な日本、洗練された日本の縮図であり、「三十七万七千平方メートル」の日本の姿が見えてくると思います。

「日本のトイレは世界一」と言われています。そして、日本の代表的な文化の一つになりました。日本へ旅行に来て爆買ばかりしている中国人観光客が日本のキレイなトイレを見て、中国での生活を見直してもらいたいものです。

「世界一正直な国」

ドン・フン・タオ

（ベトナム。山九俣（日本）勤務・女・二十七歳）



私は、広島日本語学校と福井県立大学の六年間の留学体験を通じて断言できるのは、日本は「世界一正直な国」ということだ。

警視庁遺失物センターの調査によれば、二〇一六年に東京都内で警察に落とし物として届けられた現金は約三十六億七千万円に達し、そのうちの七割以上が持ち主に返されたそうだ。日本人の多くが、拾ったお金をネコババせず警察に届けていることは、多くの外国人にとっては驚くべきことだ。海外でも、日本人の正直さが称賛された。

私は小さい頃、家の近くで財布を拾ったことがある。従兄弟はそれを持ち主に返すことに反対したが、頑固な私に負けて、ようやく返すことができた。私は持ち主の笑顔を見ることが出来て、とても嬉しかったのだが、それを家族に報告すると、「なんでお金を返したの？」と、半ば馬鹿にしたように私を笑った。その時戸惑った私が、大人になってだんだんと気づいてきたのは、貧しい国での信頼関係というのは、何より価値のある、ということだ。落とし物が戻ってこなかったり、盗まれたりすることも珍しくないため、いつの間にか、人間同士の信頼が失われていく。

そんな他人への不信感に困惑していた私は、日本に来て衝撃を受けた。

ある日、下宿の駐輪場に戻った私は、自転車のカゴの中の小さい袋に気付いた。袋を空けてみると二千円とメモが入っていて、そこにはこう書かれてあった。「ごめんなさい。自転車をぶつけてカゴを壊してしまいました。少ないですが受け取ってください」。確かに、よく見るとプラスチック製のカゴが少し欠けていたが、黙っていればわからないくらいだった。母国はあり得ない奇跡が起きていた。相手がいらない所でも、ちゃんと責任を取るといふ日本人の行動は、私に大きな感動と感激を与えてくれた。そのことがきっかけとなり、私は「人間の信頼関係」について真剣に考えるようになった。

今までは、人間が正直でないのは貧しさのせいだと思いつ込んでいた。本当にそうだろうか。あの東日本大震災によって、私の思い込みが大きく覆された。地震発生直後、米国メディアが日本人の「精神的な回復力」を絶賛していた。災害時の「物資の略奪」などは、東日本大震災ではほとんど見られなかった。それこそが、日本人の誠実さなのだろう。

私は、「正直な心」を持つ日本人の素晴らしさを、ベトナム人に知ってもらうために努力したい。近い将来、母国に、正直な人達がいっぱいになることを願っている。